「ほがらかづくり」

社会福祉学部　社会福祉学科２年　赤塚　雄太
活動先：ほがらか企画
岡本ゼミ

1.　自分の成長と気づき：キーワード「自発性」「共育」「利用者主体」

自分の成長は、「自発性」である。これまでの発表では、調べたことを発表することしかできなかったが、体験を基盤にした学びや考えを主張できるようになったと思う。根拠となる体験があることで、説得力につながったと感じている。「自発性」の大切さは、誰でもはじめてのことに対し、失敗への恐れや他者がどこまで介入して良いかという悩みがあるが、活動から、一歩踏み出すことが大切だと学んだ。子ども達が夏祭りを盛り上げていくために、自分達から、職員や私達に働きかける姿や共に準備・実施していくことで、「自発性」の大切さを学んだ。

自分の気づきは、「共育」の必要性である。「共育」は、「～してはいけない」「～しよう」という一方的な関わりでなく、「一緒に～しよう」ということや子どもからの「～したい」という思いにどれだけ応えるかだと企画を通して、気づいた。

活動前は、私達で企画を決定し、子ども達に楽しんでもらうという方針だったが、アンケートを行い、何をしたいかと問うことで、子ども達の意思を尊重するだけでなく、子ども達に関心を持ってもらううえで、大切なのだと学んだ。強要されることと自分達で決めたことでは、取り組む姿勢も大きく変化するからだと思う。また、実物を見せて説明することで、イメージしやすくするといった子ども達の時間を使わせてもらうので、「説明責任」があると学んだ。キーホルダーづくりでは、実際に企画ができるか試すことで、安心・安全面を確認することや写真立てといった企画では、「こんな方法もあるよ」と企画を提案するだけではなく、創意工夫を提案していくことも大切だと学んだ。また、活動を通して、「利用者主体」の大切さを学んだ。「利用者主体」には、意思を尊重することだけではなく、必要以上に規則で縛らないということを学んだ。「安心・安全」に実施してもらううえで、危険だと感じることに対しては、規則を設けるべきであるが、「楽しく・豊か」に行うためには、自由を守る（保障する）ことも必要なことだと考える。また、紙飛行機対決を行ったが、人に向かって物を投げないといった当たり前だと思うことを再確認することも「ほがらかづくり」には、必要なことだと感じた。

「ほがらかづくり」とは、「One for All, All for One」（一人はみんなのために　みんなは一人のために）という関係づくりで成立すると感じ、「共育」の在り方だと考える。活動目的は、企画で子ども達の反応を共有し、ほがらかになることだったが、企画実施時だけでなく、子ども達から、会話をしてくれたことが嬉しかった。これからの活動でも基盤が大切だと思う。また、企画や夏祭りで、共にほがらかになった機会が多くあったと感じる。活動での感情共有や情報共有が、報告会での自分の考えを主張することにもなったと思う。活動後は、自分の成長にもつながった経験だと感じ、「きっかけ」を積み重ねていくことで、自信につなげることが大切だと思うようになった。

2. 地域や市民活動の現状や課題：キーワード：「きっかけづくり」「住民主体」

人々の地域への関心の希薄化や市民活動参加者数は減少傾向にあり、また、NPO などの地域貢献を行う資源があることを認知する人が少なく、SOS を発信・察知することが難しい現状がある。この現状の背景には、知るきっかけがないとことがあると考える。「居場所づくり」ということが強く求められている社会であるが、活動参加の時間・機会が少なく、居場所は安心・安全を継続的に得られやすいものだからではないかと考える。安心・安全のうえでは、居場所があることは、強みだと考えるが、楽しく・豊かに生活していくうえでは、活動参加の時間・機会が大切だと考え、「きっかけづくり」を行っていくべきではないかと考える。小・中学生の頃に、あいさつ運動を行ったが、どこか教養ではなく、強要されていると感じていた。活動でのやりがいを感じられなく、なぜその活動が必要かという意味を理解していなかったからだと思う。やりがいを感じるには、達成目標を設定することで、目的意識を明確にしていくことが、必要なことだと考える。

「ほがらかづくり」とは「きっかけづくり」だと考える。「きっかけづくり」とは、活動参加の時間・機会だけでなく、知る機会も含まれると思う。活動参加するには、実物・現状を見ることが必要だと考えるからである。NPO のバスツアーがあったが、物事を身近に感じるには、まず見ることが効果的だと感じた。また、見ることで、考える「きっかけ」にもなると思う。活動時は、顔を覚えてくれて、「一緒に～しよう」と言う姿や「次はいつ来てくれるの」と話す姿は、嬉しく、やりがいを感じた。やりがい・生きがいを感じる「きっかけ」が必要だと学んだ。

活動を行う前は、活動先が、障害児施設ということから、子ども達が社会生活をできるように、教育を行う施設だと思っていたが、活動を行うと明るく元気な子ども達で、自分達が中心となって、夏祭りへの準備・実行する姿から、子ども達から教えられることが多くあった。人は「無知」であると知らない内に、固定概念から、差別や偏見を持ち、人と地域が分離されているのだと感じた。人の排除でなく、固定概念を排除することが大切なことであり、他人事を変えるために「福祉教育」は、重点にすべきことだと考える。車いす体験などの社会的弱者は大変だというマイナスのイメージばかり学習し、固定概念にもつながっていると感じ、「福祉教育」の方法については、改善していくべき課題であると考える。

「利用者主体」から「住民主体」として考えるには、サービスラーニングでは、活動・研究での自分の学びが多くあったが、「福祉教育」の在り方として、学びの対象を広げるには、小・中学性と共に考えることも一つの活動だと考える。福祉を身近に感じるには、施設での実践に限らず、災害時どんな場所が危険かという危険地域マップを一緒に作成し、防災を考えるといった様々な形があって良いと思う。活動から、受け身の学習でなく、自発的な学習、共育が大切だと考える。

「住民主体」と考えると難しく感じるが、自分にしかできないことを一つ見つけるのではなく、自分にもできることをたくさんつくっていくことが必要だと活動を通して気づいた。例えば、町の広報誌を読み、関心を持つことや町のお祭りに参加して、交流する場を広げることもあると考える。日常生活での「きっかけ」が、災害時に「想定外」で片付けられないためにも大切なことであると思う。

サービスラーニングを通して見えてきたもの
～目標達成の裏側～

社会福祉学部　社会福祉学科２年　鎌田真央
活動先：ほがらか企画
岡本ゼミ

サービスラーニングを通して見えてきたもの、それは周りの人の支えである。私自身、やりたいことや興味のあることが明確になっていないことから、サービスラーニングでの目的がぼんやりしていた。ぼんやりしているまま、活動先も何か目的があるわけでもなくなんとなく決めてしまっていた。活動先は、高齢者を対象とする活動団体に行くことになるだろうと思っていたが、全く知らない分野である障がい児を対象とする活動団体に行くことに決まった。障がい児についての知識が全くないことや、怪我の入院によるゼミの欠席も続いてしまい、活動に対する不安は大きいものであった。活動をするにあたってグループに分かれたが、そのグループにも途中からの参加ということもあり、あまり馴染めずにいた。事前に活動先について調べる段階を、グループのみんなと一緒にできていなかったため、そこでも私と周りに差が生まれてしまっているように感じていた。だが、グループのみんなは、調べものの役割を決めるときや、ゼミで発表をするときなど、私のことを気にかけて役割などと与えてくれた。このとき私は、周りの人に支えてもらっていると感じることができた。活動に対する不安は大きいはずだったが、グループで活動を進めていくうちに、このみんなと一緒ならばやっていけるという気にもなった。グループのみんなと話し合い、活動の目標は「子どもたちと仲良くなって、一緒になって楽しむ」に決まった。そうして、活動に向けて、企画を考えたり、一日一日の目標を決めるなど、グループで準備を進めていった。

活動１日目。まずは子どもたちと仲良くなることを目標に取り組んだ。初日ということもあり少し緊張をしていたが、子どもたちからコミュニケーションを取ってくれて、緊張がほぐれ、私から積極的にコミュニケーションを取っていこうと思えた。一日目は、活動先の、子どもの意志を尊重するという考え方を大切にしていることが見えてきた。

活動２日目。一日目とは違い子どもの人数が多く、全体に気を配ることが大変だった。喧嘩が起きてしまい私一人では対応ができず困っていたが、スタッフの方が子ども一人ひとりの話を聞き、個別で話を聞いている様子をみて、喧嘩が起きたときの対応の仕方を学ぶことができた。

活動３日目。この日は学生企画であるキーホルダー作りを行った。私たちで考えた企画を楽しそうに取り組んでいる様子が見えて、企画を成功させることができてよかったと感じた。

活動４日目。子どもたちは夏休みが終わり、学校が始まったため疲れからか普段とは違ったように見えた。ぼーっとしていて転んでしまった子どももいたため、こういった日こそ、子ども一人ひとりの行動に注意深く目を配らなければいけないと感じた。

活動５日目。学生企画である、まとあて大会を行った。まとあて大会では、企画を始める直前に、事前に準備していたことと変更してしまった点があり、事前にもっと子どもたちのことを考えて工夫をして企画を進めていくべきだと反省をした。また、興奮状態だっ

た男の子が、小さな女の子を突き飛ばしてしまう場面があり、私自身動揺してしまい何もできなかった。このような場面はどこでも起こりうることであるため、スタッフが冷静になって対処しなければいけないと感じた。

活動 6 日目。最終日は、私自身驚くほどほがらか企画という場に慣れていると感じることができた。

6 日間という短い時間ではあったが、毎日感じることは多く、学ぶこともたくさんあった。一日一日成長していると感じることができ、この六日間は非常に充実していた。企画では、反省するところもあったが、子どもたちの楽しんでいる様子を見ることができて、さらに私自身も子どもたちと一緒になって楽しむことができた。「子どもたちと仲良くなって、一緒になって楽しむ」という目標を十分に達成できたと思える 6 日間になった。

この目標達成の裏側には、グループみんなの支え、活動先のスタッフの支えがある。企画は私一人では、絶対に成功はできなかった。グループのみんなが考えを出し合って、みんなが率先して動いてくれたからである。また、活動先のスタッフの方には、私が困っていたらどうしたら良いか行動で教えてくれたりと、多くのことを学ばせてもらった。スタッフの存在が私を大きく成長させてくれたのである。

また、活動を通して活動先は、武豊町で様々な活動をしていることが見えてきた。同じ NPO 法人同士で協力していることが多いと感じたが、地域住民の参加が増えていけれは、活動はもっと大きなものになっていくと考える。武豊町内でどういった活動をしているか、まずは知ってもらうことから始めて、住民参加の輪を広げていければ良いと考える。NPO 法人は、お金が足りないといった金銭面での課題があるけれど、この課題も地域住民の理解が深まれば、少しは解決につながるのではないかと考える。NPO 法人についての知識も全くなかったけれど、NPO 法人は地域と連携することが第一に大切なことであると感じた。

最後に、サービスラーニングを通して、周りの人の存在が私に良い影響を与えてくれて、成長させてくれたことに感謝をし、私自身もこれからは逆の立場になって、周りの人を支えていける存在になりたいと思う。

ほがらか企画を通して感じた地域と関わることの大切さ

社会福祉学部　社会福祉学科 2 年　高橋佑佳
活動先：ほがらか企画
岡本ゼミ

①　自分の成長と気づきについて

私はサービスラーニングを通して、利用者さんのことを考えて関わることができるようになったところが成長した部分であると考える。特に企画を通してその力を身につけることができた。私たちは夏祭りを 2 日間と最終日の計 3 回、企画を考える機会をもらった。夏祭りではプラ板でキーホルダーを作ることを考えた。子どもたちに自分の好きな絵を描いてもらい思い出に残るようにした。1 日目のときはプラ板を四角く切るようにしていたが、それだと角ができて危ないから角を無くしたほうがいいのではないかというアドバイスを施設の方からしていただいた。そのため、2 日目のプラ板は丸い形に変え安全性を高めるように工夫することができたのである。

最終日の企画では写真立てと飛行リングというものを作った。これは子どもたちにいくつか候補をだし､アンケートをとって決定した｡勝手に何をやるのかを決めるのではなく、子どもたち自身がやりたいといったことするようにしたのである。そうすることで子どもの意志を尊重することができたのである。ダンボールと厚紙でフレームをつくっておき、子供達はシールを貼ったり、絵を描いてもらったりして簡単にできるようにした。写真立ての組み立ては子どもによっては得意、不得意があるので、自分で組み立てたいという子がいたらやってもらえるようにした。飛行リングを作る際も手先の細かい作業があまり得意ではない子は手伝いながら一緒に作業をした。子どもそれぞれの好きなこと、得意なことに気付いてそこをいかせるように作業をしてもらうことができたのである。

子どもたちがやりたいという意思を尊重すること。安全で楽しくできること。子どもたちの好きなこと、得意なことに気付いてそこをいかせるようにすること。そのようなことが大切であると学ぶことができ、利用者さんのことを考えて関わることができるようになったのである。

②　活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

活動を通して NPO 法人が地域の人たちと関わりを持つことが大切になるのではないかと考えた。私がサービスラーニングでいったほがらか企画は住宅街の中にあるため、地域の人たちの関わりをしっかり持つことで障害児への理解がさらに深まることにつながるのではないかと考えた。ほがらか企画はホームページでボランティアの募集をして、学生だけでなく地域の方たちもボランティアとして関わることができる。さらに、夏祭りなど季節ごとに子どもたちと考えたイベントを実施し、祭りや創立記念のイベントでコンサートを実施している。ほがらか企画に来ている子どもたちと職員さんが一緒に近所の市場に買い物に行ったりしていている。そのため、私がサービスラーニングで行ったほがらか企画は地域との関わりを持つことでできているのである。

調べていく中で、内閣府がおこなった世論調査では市民の自主的な取り組みへの意識は高いが、NPO 法人については知らない、言葉しか知らないという人が約 8 割もいるとい

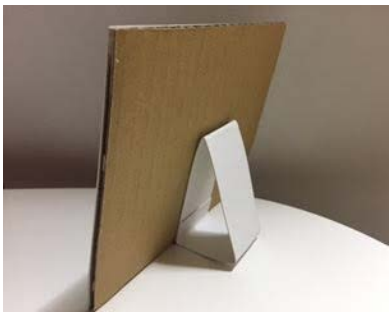
うことがわかった。そのため、何か活動をしたい、ボランティアをしたいという人が地域にいたとしても NPO 法人の存在を知らないがために、関わりがなくなってしまうと考えた。さらに、NPO 法人は予算や決算に関する情報や会則や規則などといった情報を発信してきている。しかし、市民は活動の雰囲気や参加者の様子、ボランティアの募集といった情報を欲しているとわかってきたのである。NPO 法人が発信する情報と地域が求める情報には違いがあるということがわかった。

資料などを参考にしながら NPO 法人が地域と関わりを持つために 5 つのことが必要であると考えた。1 つ目は広報活動である。地域の人が知りたいと思っている必要な情報を提供すること。必要としている人に届ける工夫をすること。例えば、必要としている人が高齢者だった場合は高齢者の人が目を通すことの多い新聞に大きな字で掲載するなどすれば良いと考えた。2 つ目はボランティアである。地域の人をボランティアとして募集して利用者さんと直接関わってみること。手芸や園芸など地域の人たちの得意なことを生かして講師として関わることがいいと考えた。3 つ目はイベントの実施である。人が集まりやすい場所でイベントをおこない、NPO 法人のことを知ってもらうことが良いと考えた。4 つ目は町内会や自治会と連携することである。町内会などは地域の人と近い存在なので、まずは NPO 法人が町内会などと連携をしていくことで地域と連携できるのではないかと考えた。そのため、まちづくりなど共通の課題から取り組むことがいいと考えた。5 つ目は中間支援組織である。知多半島の中にはサポートちたやはんだまちづくりひろばが中間支援組織として、地域との関わりも大切しているとわかった。このようなことをしていくことで、地域の方に NPO 法人知っていただき、NPO 法人と地域が関わりを持つことができるようになると考える。

キーホルダー改善前

キーホルダー改善後

飾り付けした写真立て



ダンボールと厚紙で作った写真立て

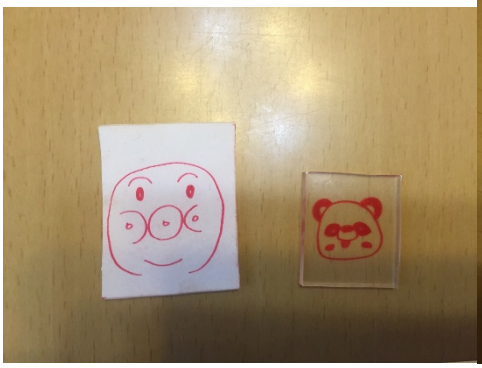
１年間の学び

社会福祉学部　社会福祉学科２年 山田　みく
活動先：ほがらか企画
岡本ゼミ

私は、ゼミの一年間で様々なことを知り、学んだ。最初のゼミで地域から体験的に学ぶというのはどういうことなのだろう。と疑問をもった。その後、授業でＮＰＯに行く機会や施設実習に行く機会があり、多くのことを学んだのである。まず、サービスラーニングに行くのに事前学習と言って、自分たちで行く施設について調べ、気になる点などを挙げていったのである。施設を調べるのと実際行ってみて、子どもたちと関わるのとは、全く違うものだと改めて感じる。

施設では、「子ども主体」ということを大切にしており、私がイメージしていたのとは少し違ったもので、何をして遊ぶのかおやつには何を食べるのか。子どもたち自身で決めていた。お昼ごはんやおやつを職員の人たちと一緒に作るということも驚いた１つである。私自身、施設の職員さんとは子どもたちが遊んでいるところを見て、危険がないか、子どもたちが楽しんでいるかと様子をみるというイメージであったが、この施設では、子どもと一緒に職員さんたちも楽しんでおり、私たちもとても馴染みやすく子どもたちと一緒になって楽しむことは大切であると考える。サービスラーニングの企画では、子どもたちと一緒になって遊び、楽しんだので、子どもたちが楽しめる企画の案を考えるのがスムーズに進んだのではないでしょうか。企画では、自分たちで考え行うことの難しさと子どもたちに安全に楽しんでもらうことを考える。６日間という短い間でしたが子どもたちと仲良くなれ、自分自身障害児施設に対してのイメージがだいぶ変わったことは、実際に体験しなければ分からないことだ。

他にも、子どもたちの失敗は失敗と捉えず、成功への道であると考える。その道を教えてしまっては、子どもたちがなんで失敗してしまったのか、考える時間を奪ってしまうことになる。何度も失敗することで得られるものがあるということがわかっているようで、なかなかそのように失敗した子どもたちを見守るということは難しい。実際、折り紙をしていて難しい動物が作れない子どもがいたが、動物を作ってあげるのではなく、私も一緒に作り、一緒に頑張り、完成させていく。そうすることで、子ども自身一生懸命作った折り紙を大切にしていたのである。「これ私作ったよ」と職員さんに見せているのを見て、失敗から学ぶ。考えて得るものというのは、こういうことなのだと考える。私たち自身も、企画で１回目に行ったキーホルダーづくりでの際、角が尖っており子どもたちに安全に楽しんでもらうには危ないと判断し、2回目に行うときには、キーホルダーを丸く作り、子どもたちに安心して楽しんでもらえるように改善した。実際に行ってみなければ分からないことも多く、何度も行ううちに成長していくのだと感じた。



最初のゼミで言っていた体験的に学ぶということは、こういうことを言うのだと知り、座学で学ぶより得るものが大きいと改めて感じる。他にも、チームで行ったことは、プラスになったと考える。１人でサービスラーニング先に行っていたら、自分自身が体験して思ったことのみで、他人の意見や違った視点からみたことを知らないままであっただろう。その後の発表で、分かったことだがパワーポイントを作成するにあたって、いろんな視点から見た施設、子どもたちの様子を施設に行ったことのないみんなに上手く伝えるには、１人の意見では、足りないと考える。一番は、子どもと関わる上で絶対に全員が同じことを感じるということはないいうことだ。いろんな意見を聞き、さまざまな視点から見るという大切さを知ったのだ。

活動を通して思ったこととして、施設について多くのことを知り、学ぶことができたが、地域のことについて活動を通しては、触れる機会が少なかったのかなと考える。１つ地域との関わりとして、施設に来ている子どもが地域のＮＰＯ法人、ゆめじろうでコロッケを販売しているのを手伝っていると聞いた。地域の中で障害者の就労支援を積極的に行っているということなのではないかと考える。

私自身、武豊のＮＰＯ法人ゆめじろうについて調べると、活動の対象は、障害のある方、介護を必要とする高齢者を含む住民全てですとある。私が行った障害児施設の子どもたちが将来大人になったとき、このような施設があることで住みやすい地域であると感じるのではないだろうか。